

ドストエフスキーとスタヴローギン：創作 ノートの”公爵”をめぐって

近田，友一

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

65

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

26

(発行年 / Year)

1988-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005228>

ドストエフスキーとスタヴローギン

——創作ノートの「公爵」をめぐって——

I

ドストエフスキーは『白痴』完結後ほとんど時をおかず『無神論』の構想をいだいている。『白痴』で「永遠の根柢」につき当たった観のある作家は、『白痴』の完成もどうかしいほどの思いで『無神論』のプランにとりかかったであろう。ハンス・ホルバインの『イエス・キリストの死』を核心に据えた『白痴』は、否応なしにドストエフスキーを信仰の問題に引きずって行った。十字架から下るされたばかりのイエスは、ただの人間の死体にすぎない。「どうしてこの殉教者が復活するなど信じられようか」——ドストエフスキーの率直な想いは一年前のバーゼル美術館から尾を引いて、それを否定し返す「論理」も見つからぬまま漸次深まって行く。信仰の世界に「論理」を持ち込むことの無意味を彼が知らなかったわけはない。しかし、ドストエフスキーの十九世紀人としての感覚は、信仰を信仰としてそのまま受けとめるには、冷静にすぎた。マイコフへの書簡で、「主人公はかなりの年配になってから突然信仰を失う」と書いたのは、おそらく、比喩ではあるまい。そこには中年の作家の像が重なっている。

ここで小生の脳裡にあるのは、(一)巨大な長篇で、『無神論』という題名です。……人物はいるのです。我々の社会に属するロシア人で、相当の年配です。さほど教養があるわけでもありませんが、かといって無教養で

もなく、官位がないわけでもありません。——それが突然、もうかなりの年配になってから神への信仰を失うのです。それまでの生涯彼はただ勤務一筋で、わだちから逸れることもなく、四十五になるまで際立ったところもありませんでした（心理的な謎。深い感情。人間そしてロシア人）。神への信仰の喪失は彼を震憾させます。（実を言うと、長篇の事件と道具立ては、とても大がかりなのです）。彼は新しい世代、無神論者、スラヴ人、ヨーロッパ人、ロシアの狂信者、隠者、聖職者などをたずねて放浪します。ついでにジェスイットで挑発者の鉤にかかったりもします。そこから鞭身教の奥深く下りて行つて、ついに、キリストもロシアの大地も——ロシアのキリストとロシアの神を獲得するのです（お願いですから誰にも言わないで下さい。この最後の長篇を書き上げた時、たとえ死んでも構いません。何もかも言ってしまう）。（以後傍点はすべてドストエフスキー）（一八六八年十二月十一日 A・M・マイコフ宛）

信仰の喪失、苦難の探求、新しいロシアの神の発見の可能性——以後のドストエフスキーの小説の枠は、すでに『無神論』のプランで決っている。アリョーシャを主人公とすると伝えられる『カラマーゾフの兄弟』第二部の最後の構想に至るまで、この同心円を大きくはずれることはない。作家は『無神論』の構想の後、様々なヴァリエーションを試みながら、基本的にはこのプランを執拗にくり返しつづける。その意味ではドストエフスキーの脳裡にあった設計図は終始変らなかつたと言える。ただ、「探求」の過程での困難さが、彼に種々の試みを強いたのである。

『無神論』の構想はアウトラインのみでデテールはかかれていない。その後約半歳の時を経てそれは『大罪人の生涯』に引きつがれてゆくことになる。

『大罪人の生涯』の現存するプランは、一八六九年夏から翌七十年夏に至る三冊のノートに五つの断片的なメモの形でこされているが、中年の主人公の記述をその幼年時代から始めるといふ点で『無神論』と大きく異っている。それは「無神論」というテーマから無神論者——大いなる罪人の一代記に構想が転換したことを示している。

それと同時に子供と父親の関係を軸にして、ニヒリスト——ドストエフスキの表現によれば「足下に大地のないことを意識した人間」——の生成されてゆく過程を辿ろうとする意図があらわれてきている。「六九年七月三十一日フィレンツェ」のデートのあるメモ——『大罪人の生涯』の最初の文字はこう記されている。

幼年時代。

子供達と父親達、陰謀、子供達の策謀、寄宿学校への入学、その他。⁽²⁾

「父と子」のテーマは以後のドストエフスキの文学の基本的構図となる。『悪霊』、『未成年』、『カラマーゾフの兄弟』ともこの構図は共通している。その意味で『大罪人の生涯』の第一メモは重要である。伝記的にみれば、『寄宿学校』はドストエフスキ十三歳～十六歳のチェルマーク寄宿学校を連想させる。以後創作ノートに寄宿学校は頻出するが、これはその嚆矢である。「寄宿学校」という子供がはじめて経験する本格的な共同生活の中の自我の確立を作家は、人生途上の重要な要素と認めたのであろう。人間の生涯を俯瞰するにあたって一つの結節点としてドストエフスキはそれを位置づけている。約三ヵ月後の第二メモでは、チェルマークの名が明示されている。

私(?)、家族、幼年時代からモスクワ、すべて彼のおかげを蒙っている。成長。チェルマーク、最初にして最後、何もかも非難。沈黙し、陰鬱で、家族を養う。みんな彼に依存している。(六九年十一月二日)⁽³⁾

ノートをみてゆくと、『無神論』の構想では、中年以降の精神的彷徨に焦点が合わされていたのに対し、『大罪人の生涯』では、むしろ、少年時代の精神形成に重点がおかれている。主人公の生涯の基礎的な部分に関心が注がれていて、成年以降の分は稀薄である。構想はあったのであろうが、メモはそこまで達していない。現存する『大罪人の生涯』のノートでは、チェルマーク寄宿学校時代を意外に重視しており、そこで他者とのかわり方、主人公

の独自性が明らかになったと考えていたことが窺える。

『大罪人の生涯』のノートで構想全体が察せられるのは、量的にも最も多い第三ノート中の一月二日付の文章である。

課題、忘れぬこと

第一幕。幼年時代のはじめ。老人と老女。

(第二) 家族、スチャール、脱走とクリコフ。

(三) チェルマーク——試験。

(四) 村とカーチャ、アルベルトとの乱行。

20——幼年時代、

20——修道院、

40——流刑まで、

20——流刑とサタン、

40——功業。

ほんの物心がついた頃から人々への嫌悪感(誇り高い情熱と人の上に立つとする性質から)。軽蔑から⁽⁴⁾。

『大罪人の生涯』の全体の構図は、おそらく、この通りなのであろう。ドストエフスキー自身、中年からの信仰喪失というテーマから生涯にわたる一人の人間の精神的彷徨を書く方に意欲を持ち出したようにみえる。

主人公は権力志向型の性格で、「人々を晩拝させよう」とする無限の支配欲をもっている。彼が町でも寄宿学校でも破廉恥な行動で人々をおどろかすのも人間への嫌悪と軽蔑にその原因がある。誰もが彼を変人とみなし、嘲笑と恐怖の気持をいだき、彼は彼でその性格から疎外感を一層つよめるに至る。彼は蓄財に異常な関心をもつ。それは金の人々を支配する「役に立つ力」であると信じているからである。

彼のこのような性格は、父親アリフォンスキーと継母によって形成される。ドストエフスキーは、「偶然の家族」の意識をもちつけ、お互いに他者としての父と子の関係を明確化しようとした作家だが、その文学的表現の最初のあらわれはこのノートである。ドストエフスキーは、主人公と両親の相容れない関係を慎重に設定している。

アリフォンスキーのところで——兄弟ではない。それを思い知らされる。

粗暴な、知恵の足りない、馬鹿者をよそおう。……

スチャールのところで。アリフォンスキー、彼を折檻する。無駄だとわかる。アリフォンスキー夫人が考え出した。逃亡。クリコフと一緒に逮捕される。(第三メモ 七十年一月二日)⁽⁵⁾

ここまでのところは、年令的に近いこともあって『未成年』のアルカージイに重なる。現存する『大罪人の生涯』のノート全体からみても、アルカージイに該当する部分が量的に最も多いであろう。このことは、アルカージイの年令より先の部分は、あまり書かれていないということの意味している。構想全体からみると、幼年時代から修道院までのところで、その後の「流刑まで」、「流刑とサタン」、「功業」はほとんどかかれていないということである。作家自身、主人公の幼年時代にこだわったためでもあろう。自意識過剰の野心家の少年の像は出来上がったが、そこから「大罪人」に発展させるには、内在的な「思想」の不足は否めまい。大作にするには主人公にバネが足りないことを作者も気付いていた筈である。例えば、主人公の性格が非凡なものをもっている所以を、トルストイへの対抗意識をあらわにしているものもそれなりの意味と計算があるであろう。

N・B トルストイが『幼年時代』や『少年時代』で描いた高尚な伯爵家の子孫——卑しいまでに矮小化してしまった子孫とは、まったく正反対のタイプ。これは土着人の一タイプ——自分自身の、まぎれもない力、全く直接的な何に基いているか知らない力に無意識のうちに不安をおぼえているタイプにすぎない。土着人のこのようなタイプは、しばしばステンカ・ラージン型かダニラ・フィリップovich型として出現するか、

あるいは、全鞭身派や去勢派にまで至る。これは並々ならぬ、彼ら自身にとっても重い直接的な力で、何に依っているか何を指針としているかを追求し、探求している力——苦しいまでに嵐からいこいを求め、その平穩の時の至るまで暫くは荒れさわがずにはいられない力である。彼は最後にはキリストを依り処にすることになるが、その全生涯は——嵐と混乱である。……

無限の力は直接的であり、いこいを求め、苦しみをおぼえるまでに動揺し、探求と遍歴の時代に、とてつもない逸脱や実験に喜んで飛びこんでゆく。無限の力はその時の至るまでしばらくは、彼らの直接的な動物的な力につり合うような思想——極めて確固としており、結局その力を組織し、その力をおもねるような静けさになで鎮めてしまうような強固な思想を確立できないのである。(第三ノート 七十年一月一日)⁽⁶⁾

この部分はアルカージイよりスタヴローギンに通じるところが多い。足の悪い娘カーチャの凌辱と、彼女との深い因果関係、懲役人クリコフとのかかわりと犯罪は、そのまま『悪霊』のシチュエーションに移されることになる。『大罪人の生涯』の主人公の犯罪、放蕩、悪行も表面的なら、修道院でのチーホンとの接触も唐突であり、あまり必然性がない。チーホンの精神的境位はそのままゾシマ長老に移行する。第四ノートは『カラマーゾフの兄弟』に共通するところが多いように思われる。要するに『大罪人の生涯』は、アルカージイとスタヴローギン、ゾシマの部分に分かれている感がつよい。三者を有機的に融合させようとした作者の意図は必ずしもみのったとは言えない。最後の断片である七十年五月三日には、「非凡な人間——しかし、一体彼は何をなしとげ、何を成就したのか」と書いている。これは作家の感いであると同時に、この実現されなかったプランをみる読者の疑問でもある。

N・B ビストル自殺をしようとしていた(赤ん坊は棄てられる)。

最後は自分の家に養育院をつくり、ガースとなる。すべてが明らかになって行く。
罪を告白しながら死んでゆく。(七十年五月三日)⁽⁷⁾

『大罪人の生涯』のノートはこのメモで終るが、いわゆる「犯罪」の方はあまり明らかではない。犯罪者の意味と神に叛く者の意味を「大罪人」にこめてはいるものの、ニヒリズムとその超克の過程のプランも明確とはいえない。ドストエフスキーの構想自体からすれば、かなり眼高手低であることは、七十年三月二十五日のA・マイコフ宛書簡と対比してみれば、自明であろう。

長篇の総題は『大罪人の生涯』ですが、各篇がまた別々に題をもつことになります。全篇で展開される主要な問題は、小生が一生涯、意識的にも無意識的にも苦しんできた問題——神の存在ということです。主人公はその生涯を通じて、あるときは無神論者に、あるときは信仰者に、あるときは狂信者、分離派教徒に、あるときは、再び、無神論者になります。第二篇は全部が修道院で展開されます。この第二篇に小生は自分の希望のすべてをかけています。……

第二篇には中心人物として「チーホン・ザドンスキー」を登場させたいと思っています。もちろん名前は変えますが、やはり僧正で、修道院で静かに暮しています。刑事事件に関係した早熟で墮落した十三歳の少年（小生このタイプを知っています）、これが全長篇の未来の主人公ですが、現在は両親（我々と同じサークルに属する教養人）の手によって教育のために修道院に入れられています。この狼の仔、ニヒリスト少年がチーホンと近づきになります。

『大罪人の生涯』の主人公とチーホンを結ぶ接点は、ドストエフスキーが考えている以上に稀薄であった。『未成年』のアルカージイがそうであるように、主人公の「宗教的探求」は、あまり主人公の性格と合致していない。むしろ、そういうものとは遠いところに位置していると言ってもよいであろう。主人公は実家であり、現実主義者である。アルカージイの思想的な透明性をこの主人公ももっている。ドストエフスキーは「中年になってから突然信仰を失う」という発想を、ニヒリズムの生成を幼年時代から追究しようとする壮大な実験に切替えたが、主人公の性格づけのところで結局は暗礁にのり上げてしまった。ネチャーエフ事件に作家が関心をもったのは、ライフ

ワークとは別に、「一寸した政治的パンフレット」をかこうとした意図からでもあるが、『大罪人の生涯』から一時的に逃れようとする気持も働いていたのであろう。ネチャーエフ事件の起ったのは、六九年十一月二十一日であり、『大罪人』のノートは翌年一月末で一時中断し、以後三カ月余、最後のノートに至るまで中絶する。

降って湧いたようなネチャーエフ事件をドストエフスキーは、あまり自分とは密着したものと考えていなかった節があるが、作者自身が思っていた以上に、この題材は彼の年来のテーマ——「父と子」にかかわってくる問題を孕んでいた。『大罪人の生涯』の構想が中途半端なまま、『悪霊』にとりかかったドストエフスキーは、『大罪人の生涯』の構想が崩れ、『悪霊』の創作ノートに『大罪人』の人物、デテールが混入してくるのを防ぎ得なかった。『大罪人の生涯』が断片的メモをのこして四散したのは、当然予想されたことであった。

II

『大罪人の生涯』のノートと『悪霊』ノートの相関関係は微妙である。前者は六九年七月末から始められ、後者は六九年末頃から始まる。『大罪人』ノートは六九年末から七十年一月二十七日まで最も集中して記入され、その後五月初めまで約三カ月空白期間がつづく。

『悪霊』ノートの前身である『羨望』が六九年末から翌年一月一杯にかけて『大罪人の生涯』と並行してかかれ、以後、『大罪人の生涯』ノートの中絶後、『悪霊』ノートは単独で専心かきつづけられる。約一カ月間二つのノートはそれぞれの線路を走り、二月からは『悪霊』ノートの単線になる。五月に『大罪人の生涯』ノートは一度復活するが、そこで中絶し、以後書込みは現存しない。

両者の並行構想は、当初作家が考えていたほど容易ではなかったらしい。『悪霊』ノートと同時に進められていたと思われる『悪霊』自体の執筆も難渋し、ドストエフスキーの言うところによれば、「十度も稿をあらためて」いる。

ドストエフスキーの計算では、「政治的パンフレット」小説は、六九年末から稿を起し、翌七十年七月に完成の予定であった。その難渋の根本的原因是、『大罪人の生涯』の着手に気をうばわれていることにありと作家は信じ

ていた。一時、『大罪人の生涯』のノートを中断してまで『悪霊』の執筆に専心した意味は、早く「パンフレット」小説を片付けたい一心からだと作者は思っていた。ドストエフスキーにとっては、『悪霊』への熱中は、ライフワークたる『大罪人の生涯』への一日も早い移行を意味していたようにみえる。

だが、『大罪人の生涯』のノートを客観的にみると、作者の希望とは別に、主人公に発展性の乏しいことは明白であろう。構想を展開して行くに足る内的要因に欠ける——人物としての線が弱いことが中断につながっていることは否めまい。中断の原因は必ずしも『悪霊』執筆への専心ばかりでなく、『大罪人の生涯』の構想自体の内部要因にもあったように思われる。現存の作品では、主人公は『未成年』のアルカージイに最も近いが、この構想を背負うだけの主人公とも思えない。創作ノートの第四、第五は『大罪人の生涯』の最後のメモとなるが、中心はむしろチーホンである。『大罪人の生涯』の主人公は、結局、始動しないままで終わっている。

『悪霊』が「政治的パンフレット」小説から変身した最大の理由は、『大罪人の生涯』の行き詰り、その内部要因にある。『大罪人』の座礁が『悪霊』を大きく変えて行った。『大罪人の生涯』——『悪霊』という「上下関係」は崩壊し、『悪霊』自体が『大罪人』に代る重要な作品になりつつあった。その過程で『悪霊』の執筆が難渋したのは当然であった。『大罪人の生涯』に未練を残していた作家が、執拗にそれに気付こうとしなかっただけであるこの観点から、従来言われていたように、『大罪人の生涯』より単純に「スタヴローギン」が移行してきたのではなく、『悪霊』の構想の中でスタヴローギンが大きくなって行き、『大罪人』の主人公の要素のいくつかを吸収して行ったと考えるべきであろう。

『大罪人の生涯』の中絶はあくまで内部要因による挫折、自己崩壊であって、主人公の移行に伴う空洞化によるものではない。『大罪人の生涯』の構想の行き詰りが、スタヴローギンを生み、『悪霊』の変質を誘ったのである。この意味で『悪霊』ノート、七十年四月十日のメモは重要である。

従って、長篇の全バトスは公爵の中にある。彼が主人公である。他のものはみな彼のまわりを万華鏡のように動く。彼がゴルボフにとって代る。計り知れない高さ。

作者が『悪霊』の主人公の交代を実際に決意し、実践するのは、七月になってからである。しかし、すでに三カ月前にドストエフスキーは主人公を公爵（スタヴローギン）と定めている。つまり、『大罪人の生涯』が中断している最中に、実質的には、『悪霊』は『大罪人の生涯』を——少くとも或る部分を受継ぐ作品になったのである。

そうした変化にもかかわらずドストエフスキー自身の意識の中では、相変わらず『大罪人の生涯』の構想が残っていたことは面白い。『大罪人の生涯』の構想を語った前出のマイコフ宛書簡（七十年三月二十五日）は、公爵（スタヴローギン）の主人公を確定した三日前であり、その前日にもストラーホフへ同趣旨の手紙をかいている。

これらの書簡からみると、スタヴローギン——『悪霊』とは別に、『大罪人の生涯』の構想をもちつづけていたことがわかる。七十年五月に『大罪人の生涯』の最後のメモが記されたのはその証左であろう。しかし、そのメモの中心人物はすでに少年ではなくてチーホンであり、チーホン自身は翌月の二十三日には、はやくも『悪霊』ノートに移ってきてしまっている。

『大罪人の生涯』は、同年十二月二日ストラーホフへの書簡が最後の言及となるが、これは構想のみ残っていたということであろう。

七十年六月二十三日のメモは「幻想的な頁」と題され、シャートフとの信仰論が展開されているが、この時点から公爵（スタヴローギン）が中心人物としての本格的な意味をもち出す。シャートフの後にチーホンが登場するのは必然であろう。ここで『大罪人の生涯』は解体し、『悪霊』にその根幹部分は移行することになる。「幻想的な頁」はこの意味からしても『悪霊』創作ノートの中で特に重要な位置を占めている。

III

数々の予兆はありながら、実際にドストエフスキーが、『悪霊』の主人公交代という前例のない思い切った決断に踏みきったのは、七十年七月である。「一年間営々として書き溜めてきた原稿を反古にした」という彼の表現は誇張であるとしても、半年間彼が苦吟した作品を廃棄したの事実であろう。作品の四分の一、或いは、三分の一を

通過した地点で決断することの困難さをドストエフスキーは十二分に承知していた筈である。ほぼ四カ月前からの予兆を、だからこそ、彼は強いて認めまいとした。かつてのペトラシエフスキー党員の自信からネチャーエフ事件という恰好の材料に飛びついて、簡単に仕上げるつもり作品が難渋をきわめ、今や、彼が予想もしていなかった方向に動き出した。「政治的パンフレット」小説は全く趣を異にしたのである。

『悪霊』の変貌は、『大罪人の生涯』断念の原因でもあり、結果でもある。作家の意識の中では、なお希望として『大罪人』の構想は生きつつあったが、実質的には、『悪霊』の最終的構想がほぼ固まった段階で『大罪人の生涯』は消失する。

公爵(スタヴローギン)の深化、チーホン導入の必要は、『悪霊』が『大罪人の生涯』のメインテーマを背負ったことを物語っている。『悪霊』の新しい主人公こそが、「大罪人」そのものであることを作者は認めざるを得なかった。七十年十月のストラホフへの手紙はこの間の苦渋にみちた消息を語っている。

それから、夏にまた変化があらわれました。長篇の、本当の主人公の地位を要求してさらに新しい人物が現われてきたのです。それで従来の主人公(興味ある人物ではありますが、実際に主人公の名に値しません)は、背景に退いてしまいました。新しい主人公にすっかり魅了されて小生はまた改作にとりかかりました。初めの方を「ロシア報知」にすでに送ってしまった今となって、急にぎよとなったわけですから——力にあまるテーマを取り上げたのではないかと恐れています。おそろしく心配しています。苦しいほどです。とは言っても、小生はこの主人公をいきなり連れてきたものではありません。この長篇のプログラムの中に彼の彼割をあらかじめすっかり書きとめておいたのです(プログラムは印刷して数台分に上るくらいもっています)。それにその役割はみな、単なる考察ではなく、個々の場面で、つまり、行為で描かれているのです。ですから人物が、おそらく、新しい人物が現われてくるのではないかと思っています。期待もし、恐れてもいます。もういい加減になにかまともなものを書くべき時分ですからね。(一八七十年十月九日 N・N・ストラホフ宛)⁽¹⁰⁾

『悪霊』が難航したのは、単純には作者も認めている如く主人公としてのスチュエバン氏の「第二義性」にある。ただ、ドストエフスキーが最初企図したように、「父と子」を主題とした小説をかくつもりなら、スチュエバン氏で充分足りていたわけであって、作家の想うところが、途中から、並の「親子」ではない形を書きたい方向に変化してしまったということであらう。

『悪霊』も、『大罪人の生涯』も主人公の力量不足から行き詰った点では軌を一にしている。スチュエバン氏とニコライ・スタヴローギンを親子のような師弟関係にして異質の「父と子」を描き出そうとした作者の苦心は、主人公の取替という形であらわれ、二作品の構想の行き詰りを救ったのである。

七十年夏、姪ソーニャに宛てた手紙でドストエフスキーは、「突然、どこに欠陥があったか、何が間違っていたかをすっかり見抜いてしまいました。それと同時に、小説の新しいプランがひとりでに、完全に整然とした形で浮んできました」とかいているが、おそらく、ここには誇張はないであらう。この苦肉の策が『悪霊』を決定づけ、『大罪人の生涯』の未来を方向づけたということを天成の作家であるドストエフスキーはあまり意識していない。彼自身は『大罪人の生涯』は依然として生き残っていると信じていた。七十年十二月二日にストラホフに宛てた手紙での『大罪人の生涯』についての言及はその証左である。ドストエフスキーはすでに中身のなくなった『大罪人の生涯』に未練と執着をもちつづけながら、新しい主人公——公爵（スタヴローギン）に没頭してゆく。

IV

スタヴローギンの原型たる「公爵」の創作ノートへの登場は早く、『悪霊』の前史時代ともいうべき第一ノート『羨望』にすでに現われている。この意味ではスタヴローギンは、『悪霊』の最初から存在していた人物——作者が言っている通り「以前から書きとめていた人物」であり、別のプランから急に割り込んできたものではない。彼は『悪霊』の構想の中で成長し、『大罪人の生涯』のプランのいくつかのエレメントがそれに合体したとみるべきであらう。

『羨望』は大したプランではないが、その後の『悪霊』の登場人物の図式の雛型が早くも出来上がっている点で

注目に値する。A・B公爵（スタヴローギン）のみならず、A・Bの母親（母夫人）、養女（ダーシャ）、教師（シャートフ）、美女（リーザ）、カルトゥーゾフ（レビヤートキン大尉）の原型がすでにそこにある。物語の中心は、A・B公爵——教師——養女、A・B公爵——教師——美女の二重の三角関係である。公爵は外国で貧しい教師を知り、彼に恩恵を施してきた。それ以来二人の間には緊張関係がある。公爵は養女と関係をもち、妊娠した彼女を一万五千ルーブリつけて教師に押しつけようとするが、教師は「一万五千ルーブリ」を受取ることにこだわる。

そのうちに教師は隣人と口論、美女の面前で平手打を受けて決闘沙汰にまでなるが、相手の発砲を持ち堪え、自分は撃たない。美女はそれまで臆病者視されていた教師の行為に衝撃を受け、彼に情熱を感じ始める。公爵は教師に嫉妬をおぼえ、彼の「優越を羨む」。ここで二人の男の間にあった緊張関係は一気にたかまるが、結局、教師は公爵の許を去る。

『羨望』の題名は公爵の羨望と憎悪とを意味している。その点では作者の企図したとおり、公爵を「長篇の主人公、理想として位置づけて」いる筈なのだが、教師の方が精彩がある。公爵は人物としても変化に乏しい。ただ、『羨望』という題が示しているように、公爵の性格は後のスタヴローギンとはかなり異なる。スタヴローギンの原型としてこのことは注意しておく必要がある。

A・Bは輝かしい人物、羨望心がつよく、誇り高く、低劣、その他いろいろ。自分の本性に対して、自ら抑制することもなく、それが必要だとすら思ってもいない。（『悪霊』準備資料）⁽¹⁾

作者は、「誇り高い、輝かしい人物」としている一方で、その欠陥を看取っている——貴族の子弟の未成熟が公爵の中には表現されている。ドストエフスキーが決定稿に至るまで、スタヴローギン——公爵にこだわりつづけたことは記憶に値しよう。富裕な貴族と貧しい平民との対比が、公爵と教師の構図の中にある。この形は皇子スタヴローギンとロシア民衆の代表者シャートフの関係に引きつがれてゆくことになる。

V

『悪霊』の創作ノートの最初の正式な日付は七十年一月二十二日である。この時点からこの作品の本来の発想であるネチャーエフ事件に材をとったプランが書きとめられてゆく（この最初のプランに基く仕事は二カ月はどつづくことになる）。

グラノフスキー（スチエバン氏）が本名であられ、シャーボシニコフ（シャートフ）、学生（ビョートル）の詳細なスケッチが始まる。このプランでは、公爵（スタヴローギン）は大地主として登場しているが、学生、グラノフスキー、シャートフについてのコメントが主で、公爵の影はうすい。公爵のシャートフへの対し方をみておく必要がある程度であろう。

母夫人の養女はシャートフの妹、公爵は彼女に恋する。母夫人は公爵の不在中に養女をグラノフスキーに嫁がせる。彼にはそれが気に入らず、彼女への想い——彼自身の「情熱とたたかっている」。

公爵の許嫁の美女は学生と逢瀬を重ねている。

公爵は突然シャートフに平手打ちをくわせ、シャートフは堪える。公爵はシャートフを憎悪していた。シャートフが養女の慰め手であり、学生によれば、「公爵はシャートフに妬いている」のだ。

ドストエフスキーのノートでは、「平手打ち」は一つのキーワード的な役割をもっている。「侮辱」と「忍耐」が登場人物の精神境界を示す一つの形としてすでに前史的ノート——『羨望』の時期から現われてきている（隣人による教師（シャートフ）の平手打ち）のは、前述の通りである。周知のように、スタヴローギンに対するシャートフの平手打ちは、『悪霊』の重要場面の一つだが、最初は主客が逆であり、むしろ平凡なものだったことは興味深い。

公爵（スタヴローギン）と養女（ダリーヤ）との関係、養女の出自、身分については作者はノートの最初から苦心している。養女は公爵の心理、行動——思想を説明する鏡であり、彼女に反射する公爵の像を読者は追うことになる。どの形のダリーヤが最も主人公を映し出すことになるか、小説の方法論の上からもドストエフスキーは多様

な試みをしている。ダーリヤの役割は意外に重いのである。

一月二十二日付の最初のノートは、ネチャーエフ事件に震撼されたドストエフスキの想いが最も色濃く反映している。彼の言う「政治的パンフレット」小説を書くための材料がここに蒐められている感が深い。つまり、その分だけ、公爵の役割は軽くなっている。

公爵との恋に破れて投身自殺した妹ダーリヤの復讐を考えるシャートフ、実際にシャートフを殺害し、彼の公爵への殺意を逆用して公爵に罪を着せようとする学生（ネチャーエフ）——のプランなどは、公爵を引立て役に据えようとした意図があったことを示している。

VI

七十年二月十六日——十八日付のノートは「最終案」と題され、三部構成の長篇のプロットが記されている。依然としてネチャーエフ事件に材をとった「パンフレット」小説の構想がつづくが、公爵についての記述が増してくる。学生（ネチャーエフ）を動きの中心に据えた小説を進行させながら、公爵もまた独立した人物として動きはじめてきている。作家自身、半ば意識半ば無意識のうちに、小説の新しい側面——可能性を掘り出したと言える。ただ、公爵の性格は一定していない。正反対の要素が書かれ、作者が迷いの渦中にいることがわかる。

ここまでの『悪霊』は、学生（ネチャーエフ）、グラノフスキー（スチエパン氏）、シャートフの三者の緊張関係で作られた三角形でがっちり構成されている。ドストエフスキーはこの三角のどこに公爵をおくべきか、公爵の位置の決定に腐心している。構図面での苦心は、同時に、公爵の性格決定の迷いにつながっている。この迷いは、その後の二月二十六日、三月二日のノートでも相変わらずである。ノートには、相反するような要素、例えば、「感じのいい人物、すばらしい」というような表現と「淫蕩そのものの男で高慢な貴族主義者」のような矛盾する言葉で公爵を定義づけようとしている。

公爵が三角形からはみ出ていることが、別の意味では幸いした。旧『悪霊』の人物たちとは何か異質なものを感じ、公爵に新しい道を探らせようと作者は思い始めてきている。「新しい人間」というメモはこの点で重要である

ように思われる。

主要な思想（つまり、長篇のバトス）——これは公爵と養女、誘惑に堪え、新しい、更新された生活を始めようと決意した新しい人間である。……公爵は労働をしたいと思ひ（誇り高い公爵が）、そのことで母夫人を絶望させる。（七十年二月十八日）¹²

同じノートの別の個所ではシャートフに、「ぼくは平凡な、誠実な新しい人間になりたい」と言っているが、表現だけで明確な内容が伴っているように思えない。多分、最初に「新しい人間」のイメージがあつて、それが言葉だけではなく、内容を求めるものにふくらんで行つたのであらう。公爵——「新しい人間」のイメージがはっきり固まつたのは三月に入ってからである。

*

三月十一日付のノートの冒頭には、「公爵最後の形象」というタイトルがきている。『悪霊』の転換を示すもっとも重要な個所はこれであらう。これまで迷いつづけた公爵のイメージがここでは明確になり、旧主人公にとって代つた新しい主人公の像がはっきりと現われている。

公爵は一切の疑問をすでにすっかり解決してからやつて来た。

彼は——新しい人間。……内にひそんだすさまじいエネルギーをいだきながら減多に発言せず、すっかり謎を解き、最終的な思想をすでにいだいている人間のように、冷笑的に懷疑的に人々を見つめている。彼はある時点まではみんなの話をきき、ほとんど反論しない。肚の中では傲慢にグラノフスキーを嗤ひ、シャートフにひどくハツとしながらも彼の机上論、出口のなさを明らかに見て取り、驚きと好奇心からネチャーエフを注視し、彼の話に耳を傾ける——連中がかくも確固として立っていられるのは、どういふ基盤に基づいているかを最終的に推察出来たらと思ひながら（N・B ネチャーエフとは以前にもかかわりがあった）。ゴルボフだ

けが彼を震憾させる。彼は熱狂的に（しかし、手短かに、ほんの二言で）、それは全く自分の思想でもある、自分が見出した信念であるとゴループフに告白する。公爵はこの町でおかしたあやまち、侮辱等をいやそうとやって来たのだ。侮辱した人達と仲直りし、平手打ちに堪える。⁽¹³⁾

このノートでは、ほぼ決定稿のスタヴローギンの像が出来上がっている。主たるところではゴループフとの関係だけが決定稿と異っている。

ゴループフを作品に導入しようとした意図は早く、すでに二月十八日のノートに、ネチャーエフの策謀を記した個所に、同時に、ゴループフの名がみえる。さらに二月二十六日には具体的にゴループフの言葉——「さらに大きな謙抑が必要です。自分を無とみなされるなら、救われて、安らぎを得られるでしょう」が記されている。ドストエフスキーはこの分離派出身の民間の哲人につよい関心をいだき、彼の「自由」の理解のうちにある「自己制御」の思想を公爵のハ出口Vとして考えようとしていた。シャートフに「移植」した彼自身の「正教の思想」にいま一つ得心の行かない公爵（スタヴローギン）は、ゴループフによって一定の解決の方向を得ようとする。この段階での検討は、ノートで執拗につづけられている。

これは思想の人である。思想が彼（公爵）をとらえ、彼を支配している。それは彼の頭の中にあって彼を統御しているというより、むしろ、彼に肉体化し、苦悩と不安をとまねながら公爵の本性となる性質をもち、一旦本性に入りこんだからは、ただちにそれは行動に用いられることをつよく求めるのである。……シャートフ、ゴループフのもとで信念を確立することを求めようとする。ネチャーエフにも求める。グラノフスキーの言うことにさえ耳を傾ける。結局、ゴループフの思想に根を下ろすことになり、他はすべて斥けられる。……ゴループフの思想は謙抑と自己制御であり、神と天国はわれらのうちに、自己制御のうちにあって、自由もまたそこに存する、というのである。彼はゴループフと出会うことを予期していなかった。彼に出会って衝撃をおぼえ、畏怖し、己を空しくして彼に従う。（七十年三月七日）⁽¹⁴⁾

「ゴループ」の思想は別に目新しいものではない。他ならぬゴループという人間の口から出たことに意味があるのである。シャートフに植えた自分の思想とゴループのそれと、そこに差があることをスタヴローギンは理解していた。しかしまた、肉化されたゴループの思想を觀念として受取ることとは不可能であることも公爵は熟知していた。思想のもつ個別性をスタヴローギンの犀利な知性は超えることが出来ない。ゴループの思想——信仰に「出口」を求めようとしながら、それを求め得たとしてもそれが虚偽であることをスタヴローギンは悟っていた。結局、「信仰」を理性的に追究してゆくことの無意味さが公爵を疲弊させる。自分は何者でもないという感覚だけが鮮明になり、先人の無用者同様退屈の中に彼はおちいる。

公爵——退屈になってゆく人間。ロシアの一時代の果実。彼は傲慢に自分自身であることが出来る。つまり、貴族からも、西欧からも、ニヒリストからも、ゴループからも身を避けていることが出来る（しかし、彼にとって疑問はこのころ——彼自身は一体なものなのか？ 彼にとって答は——無）。……

しかし、彼は生れつき高潔な人間であり、何ものでもないことは彼を満足させず、苦しめる。自分自身の中にはいかなる基盤も見出すことが出来ず、退屈である。……

養女を愛していないことを感じる。領地に去り、手紙で彼女に、彼女の心を奪ったことを詫げる（夢中だったのは彼自身であり、最後の自己欺瞞）。しかし、彼は退屈で、彼女を仕合わせに出来ないとも書き、ピストル自殺する。

その直前、最後にゴループを訪ねる。「ほかの人々のように——母や、伯爵や、グラノフスキーや、知事や大文豪のように、ぼくが生きていけないことに驚いているんですよ——」と言う（答——彼らより高いから）。作者の思想——自分に大地が欠けていることを意識した人間を示すこと。（七十年三月十五日）⁽¹⁵⁾

『悪霊』はこの段階で、三角形を形成していたグラノフスキー、学生、シャートフの三者が後方に退き、三角形のはずれに位置していた公爵が、三角形を崩して中心に据り、他の人物は公爵——スタヴローギンの周囲を円を描

いて巡ることとなる。「政治的パンフレット」小説は「形而上学的」小説に变身する。このノートのメモから二週間後作者は、「公爵——主人公」宣言をするが、実質的にはこの時点ですでに、前例をみない主人公の交代劇は出来上がっていたと言える。

七十年三月二十九日のノートの冒頭は、「ゴループフは不要」のイタリック体の文字である。すぐ直後の行が「長篇の主人公は公爵ということになった」という交代宣言である。「ゴループフ」に安易に「出口」を見出させなかったことが、同時に、公爵（スタヴローギン）の確立を意味していることをこのノートの記述は示している。「ゴループフ不要」のイタリック文字はもう一度同じノートでくり返され、既述のように、主人公の再確認と小説の方法论が述べられている。⁽¹⁶⁾

「退屈」——「ゴループフは不要」——「公爵が主人公」の三文字はつながっている。ここに至るまで作者は随分回り道をした。『悪霊』の第一ノート『羨望』で偶然、公爵を主人公に擬したことはあるが、作家のすべてを背負った主人公としてスタヴローギンが誕生しようとは、ドストエフスキー自らも全く予想しなかったことであろう。結果的には、彼のライフワーク——『無神論』、『大罪人の生涯』のテーマは公爵によってゆくりなくも実現されることになったのである。

VII

三月二十九日以後、二カ月近くノートには書込みがない。次に現われるのは五月末で、「最終的メモ」、「長篇全体のプラン（最終案）」とつづく。公爵の言動は、ほぼ決定稿のスタヴローギンを想定させるまでに凝固しているが、決定稿と最も異るのは、シャートフ、ネチャーエフとの対話の形で、乃至は独自のメモとして公爵の思想が詳細に検討されていることであろう。周知の如く、決定稿でスタヴローギンが自己を語るのは、最後の手紙と、チーホンの庵室での「告白」と対話だけで、あとは行動のみが記されている。この意味でスタヴローギンの思想は創作ノートの段階で究めつくされたと言える。それは七十年六月二十三日の「幻想的なページ」、「幻想的なページへ」

で頂点に達する。

「幻想的なページへ」の中の「大事な点」と頭書のあるメモで、公爵の「片時も離れない思想」がまとめられている——民衆が信仰をもつことによってロシアの正教は保持されている。この民衆の信仰が少しでもぐらついたら、西欧と同様に、信仰は失われ、解体と無神論が始まる。もし、それが不可避であるならば、ネチャーエフの言うように、「すべてを焼いてしまえ」ということになり、それは早いほどよいのかも知れない……

要は、文明人、ヨーロッパ人として信仰することが出来るか、つまり、神の子イエス・キリストの神性を信じる(17)ことが可能かという切実な問題なのである(信仰はすべてここにこそあるのだから)。(七十年六月二十三日)

処刑場の「金色の光」以来、作者が背負ってきた問題が簡明に集約されている。前作『白痴』で「ホルバインの絵」として提出したテーマをドストエフスキーはもう一度ここで取上げようとしている。『白痴』と異なるのは、この後公爵の解釈がつづくことである——この疑問に対しては文明は事実によってそれは不可能であると答える。もしそうなら信仰なしに、例えば、科学によって社会は存在しうるか、キリスト教の道徳的基盤が崩壊し、それに代る科学的道徳性は可能であろうか、身動きのとれない二律背反の中で公爵は一つのドグマともいべきことをシャートフに語る。おそらく、スタヴローギンの行動のキーワードは、ノートの上に凝結している。

だがね、シャートフ、ぼくもきみも、人間・キリストが救世主でも生命の源でもないなどということは、みんなたわごとでしかないことを知っているし、科学だけでは決して人間の全理想を補うことが出来ないことも承知している。人間にとって安らぎ、生命の源であるもの、すべての人間の絶望からの救いも、全世界の存在のための保証も、条件、sine quanon(必要条件)も、言葉は肉なりき(18)という三語のうちに含まれていることを——この言葉への信仰であることを知っている。(七十年六月二十三日)

公爵がシャートフに試みたのは、自己の思想が彼の中でいかに「肉化」しているかという一点である。公爵が思想を語れば語るほどそれは觀念として風化し、崩れてゆく。彼が耐えられないのは、自分の言葉が「信仰」にならない空虚さである。それは公爵の生と思想がずれていて、一致することがないことを物語っている。

公爵がシャートフに関心をもつのは、彼が生と思想との隙間を埋めているかのように見えるからである——しかも公爵自身の思想によって。シャートフに可能なものが何故自分には不可能なのか。信仰の本質をめぐってスタヴローギンがシャートフを執拗に、性急に追求する高名な箇所¹⁹はすでにノートの段階でかかれ、ほとんどそのまま決定稿に生かされているが、これは公爵の根元的なところに在る間を物語っているものであろう。

ネチャーエフへの興味も同様である。彼が落着いているのは「人類の生きた生活にとってキリスト教は有害であり、もし絶滅出来れば、人類は直ちに真の生活に蘇る」ことを確信しているからである。この確信が何故可能なのか——公爵にはわからない。かつて公爵の創作した人神論を極限にまでふくらませてそこに自己の生命を賭けようとしている技師（キリーロフ）も公爵には理解の埒外にいる。技師は「人間が人神になれば肉体的に変化し、信仰を必要としなくなる」と言ったが、これを裏返せば、「肉体的に変化しない限り人間は信仰を必要とする」と揶揄してシャートフに叱られた経緯を公爵は思い出す。ネチャーエフは勿論、キリーロフもシャートフも公爵には狂信者にみえる。狂信者にならない限り、思想と生の一致は求められないのか——狂信とみえるもののみが救いにつながるのであらうか。

例えば、スラヴ思想は民衆の中に生きている。彼らは、レービンの迷いを引合いに出すまでもなく、生と言葉の一致の中で生きている。信仰とは生そのものであると、おそらく、トルストイなら言うであらう。民衆の真似は到底出来ないにしろ、ネチャーエフのように、キリーロフ、シャートフのように生きられないのは何故か。公爵はノートの最初の方で「ダニレフスキーのように、……大文豪のように生きられないのは何故か」と言っているが、今この想いが再びここに現われる。「悪霊」ノートの冒頭で、公爵を主人公として小説に『羨望』と題したのは、偶然ながら符合しすぎている。

信仰は狂信とどう違い、無意識の「妥協」とどう異なるのか——公爵がチーホンに一つの解答を求めようとするの

は、この境位においてである。

VII

チーホンは「僧正訪問」という文字で七十年三月二十八日付ノートにはじめて現われる。これは『大罪人の生涯』のノートの中断と一致するが、詳しい書込みは七十年六月二十三日の「幻想的なページ」以降である。『大罪人の生涯』の最後の断片の中心人物であったチーホンが、『大罪人』のノート中絶後、そのまま『悪霊』ノートに移行してきた経緯には、公爵の「要請」があり、この対決の構図の必然性を考えたドストエフスキーの構想があらう。

公爵がチーホンを訪れた目的は、少女凌辱の「告白」を公表することについての意見を徴すること、チーホンの信仰の本質を探ることの二つに要約される。ここでは『大罪人の生涯』の主人公の像が公爵と重なっている。少女凌辱、その自殺見殺しという大罪を背負う犯罪者としての、神に叛く者としての、「つみびと」としてのイメージは、『大罪人の生涯』の年少の主人公より、公爵——スタウローギンにこそ似つかわしい。公爵は「告白」によって「功業」を得ようとし、その苦行によって自己を超えようとする。チーホンはそこに「功業」につながらない世間への「挑戦」を見、世間の笑いに堪えきれない公爵の誇り高さが、「告白」の公表を阻止するために新たな犯罪を犯すであろうことを予見する。僧正が公爵に「告白」の公表を思い止まるようすすめたのは、公爵の人間修業の度が、「自己制御」——謙抑につながるまでに至っていないと見たからである。公爵がそれを承知していないわけがない——彼はあえてその不可能を超えて、信仰者の域に近づこうとする。彼のチーホン訪問は、彼の生を根源的に問おうとした賭に他ならない。

チーホンとの問答は、ノートでは約一年間断続的につづくが、特に重要と思われるのは、七一年五月十三日の「チーホンの許にてで最も大事なこと」と題されたメモである。

公爵（テーマ）——「ぼくが伺ったのは、神の存在を証明していただきたいからです。」どうしてそんな藪

から棒に。あなたは教養のある方だし」。

公爵——「ええ、プロとコントラのことはすべて、多少とも知っていますし、証明が存在しないことも、その証明の無益を述べる資料の方がはるかに多いことさえ承知しています。しかし、問題はそこにあるのではありません。あなたが真に信じていらっしゃる方だときかされたからです。もしあなたが真に信じていらっしゃるなら、何故信じているか、ぼくに語って下されるような何かをあなたはお待ちではないかと思うからです。ぼくはこれまで真に信じている人を見たことが全くないのです。どうか何か仰言って下さい。ぼくの無作法な、熱に浮かされたような性急さを許して下さい」。

公爵——「もしぼくが不真面目な気持からあなたを訪ねたのだったら、これはみんなナイーヴ極まることだったでしょう。——しかし、そこに……そこに一つの問題があります」⁽²⁰⁾。

公爵は性急に信仰の秘密を探ろうとしている。狂信者と真の信仰者を分けるものはなにか——彼はチャーホンによってそれを悟ろうとする。人間の思想は肉化することによってはじめて意味をもつ。一片の言葉にすぎない思想がその人間の実存となった時、言葉は肉体化したのであり、生の抛り処となり得る。その方途、方法の探求——これまでの公爵の言動、行為はこの一点に尽くされている。思想が単なる言葉として遊離している限り、それは思想ではない。信仰とは言葉そのものが、そのまま生活になっていることであり、そういう人間の条件は何かを、公爵はチャーホンに求めようとする。信仰とは生そのものであり、思想と生が一致したとき、公爵の求める「新しい人間」は誕生するであろう。

しかし、公爵は自分が信仰から最も遠いところに位置していることも知っている。公爵の「告白」公表はあまり意味がないように思えるが、彼は最も超え難いものを設定し、それを超えることによって信仰に至ろうとする。それは不信心者の信仰に至るスプリングボードに彼には見えたのかも知れない。莊嚴と滑稽は紙一重であり、愚行とうつることもやむを得ない。チャーホンがそこに堪えきれないものを読んだことは間違いない。チャーホンは「修行が出来ていない。大地からもぎ離されている」とスタヴローギンを叱責する。おそらくこれが、彼の答のすべて

であらう。

IX

ドストエフスキーは「公爵の描写は一切説明しない。ただ、行為のみ描く」とノートで宣言している。「悪霊」の決定稿ではスタヴローギンは陰画で描かれている。これは単に『悪霊』の方法論として主人公の神秘性をまずだけてではない。多分作者はこれしか描きようがなかったのである。スタヴローギンの心情告白、議論——「思想」は、ノートで検証し、説明しつくした。スタヴローギンのなまの「思想」はノートの段階で終っている。いわば、ノートで直接法でかきとめられたものが、決定稿では間接法で描き直されている。作者のいわゆる解説に類するものは「告白」と最後のダリーヤ宛の手紙だけである。「足下」に大地がないことを意識した人間——これをドストエフスキーは彼の行動のみで描き切ろうとしている。

ドストエフスキーが『悪霊』で問うたものは、信仰とその現代における可能性の問題である。それはそのまま、生とは何か、真の生は可能かということである。セミョーフスキー練兵場の「金色の光」以来、作家が問いつづけてきた問題は、スタヴローギンによって一つの新しい局面に入った。彼を創造するにあたってドストエフスキーが最も心惹かれたのは、「言葉は肉となる」という思想である。「世界を救うのはキリストのモラルでもキリストの教えでもなく、言葉は肉なりきを信ずることにある」と彼は考える。

言葉がその人間そのものであり、人間を離れて思想はない。マイシュキンの言葉はマイシュキンその人であり、彼を離れて言葉は存在しない。マイシュキンの生は見事に彼の「思想」と一致している。ドストエフスキーはマイシュキン公爵と対極に立つ公爵——スタヴローギンによってこの困難な道を探ろうとする。スタヴローギンの特徴をなすものは「無関心」であり、彼の生の「焼けつくような」感覚は失われている。彼が田舎町に最初に現われた時、類稀な美貌にもかかわらず「仮面をかぶったように見えた」ことは、彼の単なる生、肉体化されない生を象徴している。生の感覚を求めようとするエネルギーだけは残っていて、それが彼を彷徨させる。生と思想との分離、離反がスタヴローギンの地獄である。言葉のみで生が救えるか——とドストエフスキーは問うている。真の生は思

想が肉体になることである。いかにして言葉を肉体化するか——スタヴローギンの関心はこの一点に集中し、彼の彷徨は、生と思想の一致しているかにみえる人間、ネチャーエフ、シャートフ、キリーロフを経て、チーホンに至る。『大罪人の生涯』を脳裡に秘めながら、作者はこの構図を完成した。

結局、スタヴローギンは思想を肉体化出来ないまま滅びるか、ドストエフスキーはなおスタヴローギンに想いをつないでいたに違いない。決定稿では削られたノートの一片に、チーホンとほとんど同じ次元にスタヴローギンが立っていたことを示す文字がある——

人間の本性がどうしても神の崇拝を必要としていることを心にとめておいてほしい。道徳と信仰は一つのものであり、道徳は信仰から発し、神を崇めようとする要求は人間の本性の奪うことの出来ない特質である。この特質は高いものであって低いものではなく——無限なるものを承認し、世界的な無限の中に溶けこむことを望み、人間はその無限の中から生れたものと知ることである。(七十年六月二十三日)

注

- (1) ドストエフスキー三十巻本全集 第二八巻第二分冊 三二九頁 「ナウカ」出版所 レニングラート 一九八五年
- (2) 同前全集 第九巻 一二五頁 同前 一九七四年
- (3) 同前 同頁
- (4) 同前 一三〇～一頁
- (5) 同前 一三二頁
- (6) 同前 一二八頁
- (7) 同前 一三九頁
- (8) 同前全集 第二九巻第一分冊 一一七～八頁 同前 一九八六年
- (9) 同前全集 第十一巻 一三六頁 同前 一九七四年
- (10) (8)と同一巻 一四八頁
- (11) (9)と同一巻 六十頁

- (12) 同前 九八頁
- (13) 同前 一三二頁
- (14) 同前 一三〇、一頁
- (15) 同前 一三四頁
- (16) (9) 参照
- (17) 同前 一九八頁
- (18) 同前 一七九頁
- (19) 『悪壁』第二篇第一章の七 同前全集 第十卷 二〇〇、一頁 同前 一九七四年
- (20) (9) と同一卷 二六八頁
- (21) 同前 一八六頁